

第 40 回大阪大学野田村サテライトセミナー

海を渡った「かもめ号」の物語

2016 年 6 月 11 日、野田村サテライトにて「第 40 回大阪大学野田村サテライトセミナー」を開催しました。今回のセミナーは、京都大学防災研究所客員教授の James Goltz（ジェームズ・ゴルト）先生をお迎えし、『海を渡った「かもめ号」の物語—津波でつながる岩手とカリフォルニアの 5 年間』と題しお話いただきました。

Jim 先生は、来日前は、カリフォルニア州緊急対応局の地震・津波・火山対応プログラム長を務められ、東日本大震災では発災から 9 時間後に太平洋を越えて西海岸に到達した津波に対するカリフォルニア州の対応を指揮された方です。

はじめに東北とカリフォルニアの共通点として、海のある景色や産業（漁業）、地層などがあり、津波の襲来地域であることを紹介されました。ネイティブアメリカンの語りに、1700 年の地震で木の上に船が上がったことも言い伝えられているそうです。その時、大槌や宮古、山田にも津波が襲来し被害があったことが記録されていると紹介されました。

東日本大震災では、20 万トンもののがれきがカリフォルニアの沿岸部に漂着し、その 6 割は漁船だったそうです。漂着した物の一つに陸前高田の高校の演習船があり、その演習船を通したカリフォルニアと陸前高田の高校生の交流活動が紹介されました。この交流活動は絵本化され、その絵本を野田村にプレゼントしてくださいました。

Jim 先生は、災害は人々の行動や教育を見直すきっかけになるといいます。無事に避難できたことには理由があり、日頃の訓練が大切であるといいます。最後にドイツの詩人リヒャルト・デーメルという言葉を紹介されてお話が終わりました。

A little kindness from person to person is better than a vast love for all humankind.

（人から人への小さな親切は、全ての人類への愛、などより大切なことです）

参加者から「東日本大震災でカリフォルニアにも被害があったことを初めて知った」、「アメリカ西海岸でも地震が多いのですか？」などたくさんの意見や質問がありました。その中で「災害の教訓を忘れてしまうことへの対策はありますか？」という質問に対し、Jim 先生は「災害時の人の行動はまだまだわからないことが多い。どのような言葉で伝えたと避難を誘導できるのか今後の課題である。東日本大震災では、大勢の方が亡くなられたが、見方を変えたと 96%の方は逃げて無事であったともいえる。津波でんでんこが伝承されていたからともいえる。しかし、高齢社会を迎え自力で避難が難しい人が増える中で、別の方法が必要ではないかと考えている。小さな親切として何ができるのか考えていかないといけない」と話されました。また「災害直後には助け合いが起こることは報告されて、みなさんも経験されたと思う。しかし、復興時に幻滅してしまうことがある。野田村では今が一番大事な時期です」とアドバイスをいただきました。



ジェームズさんがプレゼントしてくださった絵本と一緒に